

【高等学校の部・優秀賞】

戦争について

沖縄県立開邦高校
一年 井上 桃伽

第二次世界大戦で降伏してから日本は目覚ましい発展を遂げ、現在は平和な国になった。学校では平和学習が行われ、戦争や平和について学ぶ機会は必ずある。私は沖縄に住んでいるので、沖縄戦について学ぶことが多い。

沖縄は第二次世界大戦当時、日本で唯一民間人を巻き込んだ地上戦が行われた場所だ。その中で、今でいう中学生から高校生の学生は学徒動員された。

男子は雨のように爆弾が降る中、伝令や通信用の線をつなぐ作業をした。壕を掘るなどの肉体労働もしたが、中には大人と同じように戦闘に参加した人もいたそうだ。

女子は看護要員として動員された。小説と映画で有名になったひめゆり学徒隊だけでなく、沖縄には白梅学徒隊やずみせん学徒隊など全部で九つの女子学徒隊があった。彼女たちは負傷した兵隊の看護をさせられた。

戦争が厳しくなり、追いつめられると「解散」と命じられるところもあったそうだ。私がかも同じ状況におかれたらどうなるだろう。生きる術もわからないまま、死んでしまいかもしれない。実際、学生で亡くなった方の半分以上が解散の後に亡くなったそうだ。

こんな悲惨な戦争は起こしてはいけなさと改めて思った。戦争は、罪のない多くの命が奪われる。生き残っても苦しい思いをする人が多いだろう。

しかし、世界では今でも紛争や戦争が絶えない。沖縄戦や原爆のように悲惨な戦争が起

きてしまった国は日本だけではない。ドイツではナチスによるユダヤ人大量虐殺があったし、ルワンダではフツ族対ツチ族の内戦があった、最近明らかになったのは、ポーランドのカティンの森事件。考え始めたらキリがないほど、多くの悲しい出来事が起こった。

このような出来事は世界中の多くの人々が知っていて「戦争は起こしてはいけない」と思っている人もたくさんいるのに、戦争が起きてしまうのは何故だろうか。

私は、戦争をなくしていく方法の一つとして「自分には何ができるか」ということを具体的に考えていく必要があると思う。実際に戦争を体験していない私たちには、想像することでは戦争の悲惨を理解できない。だからこそ、同じ過ちを繰り返さないために戦争で起こったことを忘れてはならない。

では、そのために高校生の私たちに何ができるだろうか。私は大きく分けて四つ考えた。まず一つ目は、戦争がなぜ起きるかというメカニズムを知ることだ。戦争の理由は、宗教的なことや領土問題、経済的な問題など様々なことが挙げられる。それらの一つ一つを深く知り、戦争が起きる理由を理解することで何をすべきかがわかると思う。

次に、相手をよく知ること。相手というのはつまり、世界のことだ。相手のことを「なんとなく」知っているつもりで、本当はよく知らないでいると、偏見を持つことや感情的な争いにつながる可能性が大きくなると思う。

例えば、日本にも領土問題がある。北方領土や竹島、尖閣諸島などについてだ。昨年話題になった尖閣諸島は、中国との領土問題である。テレビや新聞を見て「なんとなく」中国に対して嫌悪感を持つ人も多いだろう。し

かし、中国の歴史や思想を勉強して、様々な立場から考えるようにすれば、見方が変わるかもしれない。イメージだけで判断するのはなく、相手のことを知って理解しようとする姿勢が必要だと思う。

三つ目は、世界とつながること。外国語を学び、世界の人々と交流することも大切だ。また、現代はインターネット上でコミュニケーションをとることもできる。旅行や留学で実際に海外に行くのもいい方法だと思う。

最後に、二〇一一年の今、沖繩で暮らす高校生の私たちにしかできないことを挙げたい。それは、地上戦の体験者たちの証言を聞くことだ。先述の学徒の生き残りの方々も、現在すでに八十代となり、高齢化が進んでいる。彼ら、彼女らの言葉に直接耳をかたむけ、質問できる時間は限られている。実際に戦争を経験した人たちから直接学ぶことのできる最後の世代とは、実は私たちではないだろうか。

そうは言っても、結局今、高校生の私たちには考えることや知ることしかできないじゃないか、と言う人もいるかもしれない。けれど、未来には大人になる私たちが今すぐに直接、世界に対してはたらきかけることができなからといって、考えることや知ることをやめてしまえば、世界では永遠に戦争はなくならないだろう。

私は高校生の今、広い知識や視野での考え方を養うことで、経験を重ね大人になった時「戦争を起こさなために何ができるか」がわかると思う。社会人になっても、すべての人が語り継ぎや平和維持活動に直接関わることができるわけではない。けれど、国際交流や経済活動でも、平和を生み出すことに貢献できると思う。